

第 I 期生の見た DWCLA

(同志社女子大学史料室講演会記録 1)

同志社女子大学史料室

はじめに

この度、同志社女子大学史料室は、「同志社女子大学史料室講演会記録」を
発刊することとなりました。

わたくしども史料室は、1994年10月24日（女子塾京都ホームの開設記念日）
に開設されました。その目的は、申すまでもなく、同志社女学校・同志社女子
専門学校・同志社女子大学(短期大学部を含む)に関する歴史的資料を収集・
整理・保管して、その歴史に関する研究と教育とに寄与することにあります。

開設記念に催された第1回展示会「創設期の同志社女学校・M. F. デントン
遺品」を皮切りとして、今日まで、毎年、新たなテーマで展示会を企画し、同
時に、展示会のテーマに関連する講演会を、学内外の講師をお招きして開催
してまいりました。このたび発刊のはこびとなりましたこの冊子は、講演の内容
を再録し適宜註釈を加えたものであります。

この冊子が、既に刊行の始まっております「同志社女子大学史料室叢書」と
ともに、多くの方々に愛読され、研究上、教育上の資料として適切に活用され
ることを願ってやみません。

2010年3月

同志社女子大学史料室運営委員長
大 島 中 正

第 I 期生の見た DWCLA

鴛 淵 紹 子

1945年8月15日、太平洋戦争がおわり、秋から授業が再開されることになりました。わたしはそのとき、同志社高等女学校の3年生でしたが、女学校時代は戦時中で、ほとんど勉強はしていなかったので、学力はきわめて低かったと思います。でも、警戒警報、空襲警報に悩まされることなく勉強できるようになって、本当にうれしいことでした。そして、その時点では、まもなく学制改革がおこなわれることなどはつゆ思いもしなかったのです。

ところが、1947年、GHQ¹⁾の指導により、新しい教育基本法、学校教育法が公布されました。すなわち、男女共学を前提とする小学校6年、中学校3年、高等学校3年、プラス4年制大学の実現です。

同志社大学では、1948年、いちはやく4年制の共学の総合大学に移行しました。5年制だった同志社中学、高等女学校は、それぞれ3年制の中学校・高等学校と女子中学校・高等学校（女子中高）に別けられて、高等学校には新制度の3年生が作られました。

問題は、長い歴史と伝統を持つ女子専門学校はどうなるのか、ということです。そこで考えられたのは

- 1 同志社大学の一学部として吸収合併する
- 2 女子短期大学をつくる
- 3 同志社大学とは異なった特徴をもつ、独立した新しい女子大学を新設する

の3種類の方法でした。この問題を考えるために、女子部²⁾側は1年の猶予期間をもちました。

特殊な意味、特徴を持つ女子大学とはどのようなものなのか？ この問題に関して当時の総長・湯浅八郎³⁾先生、女子専門学校校長・片桐哲⁴⁾先生は戦後いちはやく同志社に帰任されていた宣教師であり、女子専門学校教授であったヒバード⁵⁾先生に、この重要な問題についての検討責任者になることを依頼されました。こうして、ヒバード先生を中心に構想が練られ、同志社女子大学は1949年2月、4年制の新制女子大学の認可を受けました。

新しい女子大学の学長にはヒバード先生が推されました。先生は、自分は宣教師であり、学校行政に立ち入ることはどうか、と当初は固辞されましたが、最終的には1年間にかぎって学長になることを受諾されたのでした。

新しい、特徴のある女子大学の名前は Doshisha Women's College of Liberal Arts (D. W. C. L. A.) とされました。このリベラル・アーツとは、いったい何でしょうか？ このことばは、ヨーロッパ中世から使われていたもので、簡単にいえば一般教養を目的とした自由7科（文法、修辞学、弁証法、算術、幾何、天文、音楽）を広く学ぶことを意味しました。その後、神学、法学、医学などの専門職大学院に行くための予備教育としての性格も持つに至った、と辞書には書かれています。でも、いずれにせよ、当時の日本の人びとにとっては、およそなじみのないことばと内容でした。

設置準備委員会のメンバーは、アメリカ人の先生と、アメリカの大学で学んだ経験のある先生たちだったので、それらの方がたにとっては自明のことだったかもしれませんが、その他の人には多分はじめて聞くことばだったと思います。

さて今日は、独断と偏見に満ちているかもしれませんが、すべてわたし自身が4年間に経験したこと、感じたことをしゃべらせていただきます。

まず、これまでの制度では、同志社高等女学校（高女）5年を終えれば、ほぼ自動的に女子専門学校（女専）に進学できたのですが、女専は1948年度を最後に募集を停止し、その年の入学生が卒業する3年後には発展的に解消することが決まっていました。1949年度からは、新制同志社大学より1年遅れて4年制の「同志社女子大学」の設立が検討中でした。このため、1948年3月に高女を卒業したわたしには、

- ①とりあえず1年間女専に在学し、翌1949年4月から新設の女子大学に入る
 - ②新しくできる新制の女子高校の3年生として1年間勉強し、卒業して新制の女子大学に入る
 - ③旧制の女専（3年）を卒業し、新制大学の3年次に編入する
- という、3つの選択肢がありました。

わたしは、どうせ新制の女子大学に行くのなら、よくわからないなりに、一番新しいときに新しい学生になりたいと考えて、とりあえず旧制の女専で1年間学び、1949年に新制女子大学の第1期生になったわけです。

1949年の2月の末に、わずか1枚の紙に書かれた「同志社女子大学入学案内」がわたしたちの手に入りました。わたしたちは、読んでみただけのほとんど「これはなに？」ということばかりでした。今後どうなっていくのかもよくわからないまま、新制女子大学はその年の4月18日、第1回の入学式を迎えることになり、わたしも、中身がよくわからないまま女子大生になってしまったわけなのです。

学校側も手探り状態だったかもしれませんが、わたしたち学生にとっても、わからないことばかりでの出発です。どんなことを言ったか何も覚えていませんが、わたしは全新生を代表して入学宣誓をおこないました。

とにかく、今お話しした「入学案内」には、新しい大学の目的と性格としてこう書かれています。

同志社女子大学は明治8年同志社創立以来の基督教主義と国際精神とを背景として成立する。

現在の日本人、殊に女子に最も必要なる家庭及社会生活上の新しい知識と思想に對し正しい自覺を與えると共に、高い學術を磨き、それが現實に適應し、同時に將來を開拓する生きた力となることを目的としてゐる。それが爲に、明確に思考し、諸種の價値判斷を誤らず、自己の思想を有効に發表し、正しく行動する能力を養ひ、世界的教育理想に基いて、人格と生活力との均衡ある教養を與えることを主眼とする。

そして学科組織には英文学専攻、音楽専攻、食物学専攻の3専攻を設け、英文学専攻に100名、音楽専攻に20名、食物学専攻に60名を募集する…、などのことが書かれてはいたのですが、そのとおりにはいきませんでした。

それまでの旧制「専門学校令」による同志社女子専門学校には、1912（明治45）年の創設以来、英文科と家政科の2つがあったのですが、新制大学には英文学専攻、食物学専攻（1952年には家政学専攻になる）に加えて、音楽専攻がおかれることになりました。計画では社会学専攻も考えられていたそうですが、いろいろな事情で実現しなかったとのことでした。

専攻科目に音楽がおかれることになったので、当時女専のクラブ⁶⁾先生や、中瀬古⁷⁾先生たちは、当然わたしは音楽専攻に来るものと信じておられたようでした。というのは、わたしは高女時代からお2人の先生にピアノや音楽理論を習っていたからです。

クラップ先生という方は、ご自身のアメリカでの勉強の後、2年間ドイツで勉強され、母国の大学 (Pacific University, Pomona College) で教えておられたのですが、デントン⁸⁾先生のすすめで、1918年に音楽の宣教師として同志社女子部に来られました。先生は、戦争中はもちろんアメリカに帰っておられましたが、1946年、ヒバード先生とともに戦後の日本での生活がいかに大変なことかを百も承知の上で再来日されたのです。

中瀬古先生は、1926年同志社女学校卒業後、アメリカとドイツで音楽の勉強をされた方で、お父様も同志社の化学の先生でした。

話が少しそれますが、現在の日本ではパイプ・オルガンは、多くの学校、教会、音楽ホールに備えられています。1941年に同志社栄光館にパイプ・オルガンが入ったときには、日本にわずか3台しかない楽器といわれたものです。栄光館舞台正面の格子の裏側にパイプが並べられ、演奏台は舞台横に置かれたこのオルガンは、デントン先生の50年におよぶ同志社での献身的なお働きに対して、アメリカの〈太平洋婦人伝道会⁹⁾〉が、彼女の要望にこたえて贈ってきたださったものです。1941年という年は、太平洋戦争が、もうまさに始まろうとしていた年ですが¹⁰⁾、オルガンは奇跡的に日本に到着しました。ただ、日本にはパイプ・オルガンの組立て技師がおらず、当時まだ日本に残っておられた東北学院のゾウグ博士¹¹⁾がかりうじてオルガンのことを知っておられたので、その指揮のもと、なんとか無事に組み立てることができたのです。そして1941年6月7日にお披露目の演奏会がひらかれました。わたしの母¹²⁾はなぜかその演奏会に、小学校5年生のわたしを連れていったのです。

初めて聴くパイプ・オルガンの音色はじつにすばらしく、その頃すでにピアノを始めていたわたしは、その時直感的に、いつの日か、絶対にこれをわたしの楽器にしようと思ったのです。

その年の12月、大東亜戦争が勃発し、デントン先生はデントンハウスに軟禁状態となられ、1945年には礼拝も禁止され¹³⁾て、オルガンの音も聞かれなくなっていました。このことについては後ほどお話しします。

さて、女子大学第1期生には、人数が少なかつたわりには実にいろいろな学生がきていました。わたしなどは生まれたときから同志社をわが家同然に思っていました。地方からはじめて京都に出てきた人、キリスト教についてまっ

たく何も知らない人、さらに高等女学校を出て専門学校を1年修了して女子大学に来た人など、本当にさまざまでした。さきほどの入学案内には、募集人員として音楽専攻20名、と書いてありましたが、開校時でも数人しか居らず、夏休みが明けてみると前期にはいた人が中退していなくなっていたりして、4年後首尾よく卒業式に出席したのは、音楽専攻ではわずかに2人¹⁴⁾ だけでした。だから、わたしたちには卒業写真がありません。この理由は、音楽専攻生には卒業演奏という科目があり、1人約1時間のプログラムでリサイタルをおこなう規定があったため、曲の仕上がりが間にあわなかった学生は、当然卒業延期になったのです。逆に、わたしもう1人などは、なぜか6月にすでに卒業演奏をやってしまったので、わたしは、後期はもっぱらオルガンに力を注ぎましたし、もう1人のほうは後期になるとアメリカに留学してしまい、そのまま日本に帰ってきませんでした。そして別の1人が2月に卒業演奏をし、間に合って卒業式に出られたのです。その人は、名前のアルファベットがわたしより前なので卒業証書の番号が音楽の1番で、わたしは2番になりました。でも彼女とは、今もとてもよいおともだちです。なお、英文や家政専攻の人たちは、人数は少ないながら、ちゃんと卒業アルバムをつくっておられ、学生時代はよかった、といっておられるのですが、わたしのように、たった2人でコソコソやっていたのでは、あまり楽しいこともありませんでした。

「人間関係」と「聖書」

さて、そのころ、わが女子大学にはどのような科目がおかれていたか、そして、どのように科目を選んだか、についておはなししましょう。

新制大学では、人文科学・自然科学・社会科学の3分野からそれぞれ3科目ずつを選択必修科目としてとることになっていましたが、リベラル・アーツの同志社女子大学では、「聖書」（人文科学分野）と「人間関係」（社会科学分野）とは、選択の余地のない絶対的な必須科目でした。

「人間関係」は、あたらしい同志社女子大学の目玉科目であり、入学説明会でも学校側が一生懸命に宣伝されたのですが、実に問題の多いものでした。後に聞いたのですが、文部省の人も「同志社さんがやるといわれるのだから、まあやっつてごらんさい」といわれたそうです。先生方のなかにも、うまくやれば、あるいはうまくいけばすばらしい試みの科目だ、と思っておられた方もあったのですが、それはやり方次第だということが、はじめからいわれており、

実際、まさにそのとおりでした。わたしの同級生のなかには、これはとてもよい科目だという人もいましたが、わたしにとっては一番いやな科目でした。われわれ人間が生きていくうえで、人間関係がどれほど大切なことかは、頭ではわかっているのですが、大学の授業科目として、しかも必修科目の目玉だ、といわれては、本当にこれはどうかな、とわたしは1年間悩みぬきました。毎回異なった主題の講義を聞き、それについて討論する時間があり、本当に死にそうでした。先生がたのほうにもとまどいがあったらうし、学生側にもどうしてよいかわからなかった部分が多かったのです。とくに、私たち旧制時代の教育をうけたものにとって、討論は決して得意なものではありませんでした。もちろん、堂々と討論に加わる人もいましたが、わたしは、その時間いちども口を開きませんでした。1人抵抗していたのです。

「聖書」は、同志社に来ている以上、必修であるのは当然と思っていました。ただ、わたしたち同志社高女を出て旧制の女専に1年間行っていた者は、なぜか別のクラスで1年間、週3回〈旧約の預言者〉について勉強させられ、そのあと「聖書」の授業はまったくありませんでした。これはわたしにとってとても残念なことでした。この科目は、いろいろな角度から学べるよう、毎年、週1回とらせてほしかった、とわたしは今でも思っています。

なにはともあれ、旧制度の時代には、時間割は学校側で決められ、与えられるものであり、学生はそれに従えばよかったです。しかし、新制度になると選択肢はあるというものの、科目選びは、慣れないことをするので、たいへんでした。そのうえ、開講予定の科目が、人数や講師の都合やなにかでとれないことも多かったです。はりきって登録に行くと、今年が開講しません、といわれ、『学生必携』（現在の『要覧』）に書いてあるとおりにはいかないのです。そのため、ちゃんと計画してとっていたはずなのに、わたしの場合、4年になってから一般教育科目のなかの、自然科学分野の単位が足りないといわれて、「物理」をとらされたのです。それは卒業式の1週間前に最後の試験がありました。落したらどうなるの、と心配しながら、まあ、無事通過しましたが。

一般教育科目には、すばらしい授業がたくさんありました。「生物」「美術鑑賞」「近代文明史」「日本作文」など、わたしにとって今も忘れられない楽しい時間でした。「生物」は当時話題になっていた種無し西瓜について、また、小麦

の祖先の発見にかんして、あるいは染色体のことなどを、京都大学の木原均¹⁵⁾先生がおしえてくださいました。そして実験では、ショウジョウバエを飼育したりしました。「美術鑑賞」の同志社大学の園頼三¹⁶⁾先生は、わたしたちを、当時一般には公開されていなかった桂離宮、修学院離宮につれていってください、また、ロマン・ロラン研究で有名だった宮本正清¹⁷⁾先生にはフランス語を習いました。これらの先生たちはいずれも非常勤でしたが、とてもたのしみな授業でした。社会学は〈自殺の社会学〉がタイトルで、講師は同志社大学の竹中勝男¹⁸⁾先生でしたが、参議院議員に立候補されるとかでなにか中途半端で終わった気がします。

「近代文明史」は、東京帝国大学を出て終戦まで京城帝国大学（今のソウル大学）で教えておられた金子光介¹⁹⁾という先生でしたが、イタリア・ルネッサンス時代の、とくにメディチ家の話がお好きで、わたしにはとても楽しみな授業でした。これら非常勤の先生がたは、ほとんど京都大学、同志社大学の先生であり、とても贅沢な、ありがたい授業が多かったのです。

当時は専任だった「国文学」の加藤順三²⁰⁾先生は、お得意の近松の話を始められると、時間が過ぎても延々と話しつづけられ、みなも時間を忘れて聞き入ったものでした。同じ加藤先生の「日本作文」の時間では、100字、200字での作文を書かされ、毎回添削してくださいました。短い文章で、要点を的確に述べる習慣をつける、という、とてもよい訓練をしてくださったと今も感謝しています。わずか100字といえども、本当に必要なことは書けるのです。

副専攻制度について

英文学専攻の学生がピアノのレッスンをとったり、食物学専攻の学生が英文学専攻の科目をとったりする、副専攻制度が初期にはありました。今まで習っていたから、とピアノを副専攻としてとる人が多かったのですが、わたしはがんばって英文学専攻の科目をとり、教職課程科目も音楽と英語の両方をとりました。そして英語の教育実習までやりました。もっとも、当時は教育実習といっても、同志社内の女子中高と共学の中学で3時間ずつ教えればよかったです。

教職科目の足りないもの、また女子大学の授業時間内でとりきれないものは、当時7月に3週間開かれていた、同志社大学の夏期大学で受講しました。田畑忍²¹⁾先生の「日本国憲法」など…。とにかく、なんでもやってみたかったわた

しは、この結果、音楽と英語の教員免許状を持っています。

そのころから、単位にはならなかったけれど、あこがれのオルガンもはじめており、礼拝で奏楽をしていました。でも、クラブ先生も中瀬古先生も、オルガンはご自分が主専攻で勉強されたものではないので、わたしは正式には卒業後のアメリカ留学で単位をとることになります。

オルガンは授業前、朝6時過ぎから栄光館に行って練習したものです。門衛のおじさんに早ようからなにしに来た、といわれながら女子中高の礼拝前に練習しました。さいわいなことに、わたしは家が近かったのと、若かったからできたんですね。いったん帰宅して朝ごはんを食べ、8時20分からの1講時の授業には遅れずに出席したものです。

副専攻に相当する、ピアノや声楽、ヴァイオリンなどを課外授業として学ぶ制度は、じつは同志社女学校には古くからあり、大正時代にクラブ先生が来日されて以来、女専ではかなり本格的に行われるようになっていました。実技のみならず理論や音楽史の講義もありました。クラブ先生の音楽史の講義は当然英語でなされたのですが、そのころ学生だったわたしの母や中瀬古先生、その他の女専英文科の学生らが通訳をしていたそうです。このようなことが下地にあったので、新制大学に音楽専攻が問題なく生まれた、とわたしは聞いています。

教室、図書館、寮のこと

わたしが入学した1949年当時、女子大学、女専の使用できる建物は、今出川キャンパスの栄光館、ジェームス館、家政館（現在の楽真館の位置にあった）と、家政新館のみであり、1962年にキャンパスの東の端に純正館ができるまで、女子大学には独自の体育館はありませんでした。雨の日の体育実技はどうしていたのでしょうか。静和館の北側に木造の古い雨天体操場があり、それを女子中高と共同で使っていたのかもしれませんが、そのあたりのことはよくおぼえていません。

一般教育関係の授業は、ほとんどジェームス館であり、食物学専攻の人たちの根城は家政館でした。音楽関係は、最初は栄光館2階、中央のE202、203、204の3つの部屋が使われました。今では信じられないことですが、初年度は音楽専攻は本当に人数が少なかったので、栄光館のこの3部屋で実技もクラス

授業もやれたのです。しかし、次の年になるともう、大変なことになります。人数も少しずつとはいうものの増えてくるし、それになにしる音の出る授業ですから、どこでやってもいいというわけにはいきません。非常勤の先生の実技レッスンは、専任の先生が帰られたあと、その部屋を使用して、という状態も生じていました。そこで1951年、これはわたしが3年生の時ですが、栄光館の屋上に教室と練習室がつくられました。教室は現在は小礼拝堂と瞑想室になっています。小礼拝堂の部分では、合唱や全員のリサイタル、その他のクラス授業がおこなわれ、八角塔内の瞑想室の部分ではかつては正面についていた時計を動かす機械がまだ置かれたまま教室として、とくに声楽のレッスンに使用したのです。

今では物置と化していますが、練習室も8室できました。それまで音楽の練習室は、栄光館講堂2階の、現在は調光室とマイク調整室になっている場所ですが、そこが小部屋になっていて、じつにぼろぼろのピアノが置かれていました。寮生たちはそのピアノで練習するのですが、礼拝がはじまっても止めず、しばしば先生が注意しに行かれたものです。寮住まいの学生や、副専攻で音楽をとる学生は、そんなにしてでも一生懸命練習したのです。ただ、いつも思うのは、当時は裏の住宅地の住人たちが、音にたいしていかに寛容だったかということです。1967年に頌啓館（現在の頌美館）が音楽学科専用の建物として作られたとき、調律師が運び込まれたピアノを調律するため、窓を3センチほど開けたままで音を出した途端、裏の家から総務課に電話がかかって、「音を出すな」と文句が来たものです。冷暖房不備の時代、どんなに暑くても練習するときは北側の窓は絶対に閉めておいてください、と教師になったわたしは学生に言いまくったものです。

自然科学関係の授業は、原則的には家政館でおこなわれていましたが、家政学概論などはデントン先生亡きあとのデントン・ハウスでおこなわれたこともありました。アメリカ人の先生の授業、そのあとは久次米²²⁾先生、大西マサエ²³⁾先生、別所²⁴⁾先生が交替で教えられました。

大変なのは図書館の問題です。

アメリカのリベラル・アーツ・カレッジでは、1時間の授業にたいし2時間は図書館で予習・復習することが義務づけられていたので、わが女子大学でもその方式を取り入れようとされたのですが、当時、女子大学には家政新館の2

階の小さな一室が図書室とされていて、本はほとんどない状態でした。もちろん町の本屋にもまだまだ充分に本のない時代のこと、学校にはなにも参考書がないのです。1963年家政館の火災まで、図書館はさびしいものでした。卒業後数年たってアメリカのリベラル・アーツ・カレッジに留学したとき、授業に必要な図書は学校側がちゃんと毎回準備してくれる状態は、わたしには信じられない夢の世界のようでした。

一般の授業と同じように音楽でも週1回、1時間のレッスンには2時間練習すればよいのでしょうか？ だから、練習室のピアノは足りています、と学生主任の先生がいわれ、練習用のピアノが足りない、と文句をいいに行ったわたしたちはあっけにとられたものです。家にピアノのある通学生はよいとしても、寮や下宿にいる学生は本当に困るわけです。せっかく同志社女子大学に来て、副専攻までとろうとしている寮生のためにもものすごく怒りをおぼえたものです。栄光館の屋上に練習室が作られても、まだまだピアノの台数が足りず、遅くまで練習室にいると門衛所のおじさんが1階の出入口のドアに鍵をかけてしまうことがよくありました。携帯電話などない時代、屋上から屋根にのぼって、大声でおじさん呼び出して鍵を開けてもらったこともありました。

寮のことに關しては、わたしは自宅通学なのでよく知りませんが、当時は今出川キャンパス内に数多くの寮がありました。女子大学創設第1期生の寮生は、1年目は全員が大沢寮²⁵⁾に住んでいました。寮生活を経験した人達に聞くと、たいへんなこともいろいろあったけれど、非常によい経験をした、とたくさんの思い出を持っておられるようです。それこそ人間関係を実地に学んでいたのです。寮生は食事はすべて寮食堂で食べていましたが、通学生はお弁当持参でした。ただ不思議なことに、あの頃どんなものを食べていたのか、わたしにはまったく記憶がありません。

朝の始業時間が何時であったのかがずっと思い出せませんでした。今回このお話しをするにあたって史料室で探していただいた昭和26（1951）年度後期時間表によれば、始業時間は8時20分でした。そして1コマ45分で、5分間の休憩、あるいは90分授業の組み合わせがあり、食物学専攻の人たちは45分×3、の実験用時間割になっていました。昼休みは1時間ありました。

礼拝のこと

さて、順序があちこちしましたが、なんといっても同志社女子大学で大切な毎日の行事といえば礼拝です。

同志社女子部では、女子中高が授業前に栄光館で礼拝を行い、女専・女子大学はI講時の授業の後に礼拝の時間が設けられていました。旧制時代には時間割がきちんと決まっていますから、礼拝に出席することは当然で、きわめて自然なことでした。女子大学になっても、当初は、ほとんどみな礼拝に出席していたようですが、専攻や科目によって午後にしかならなかつたり、また、食物学専攻のように実験をとまなう科目の場合など、礼拝出席が時間的に難しい場合もありました。でも、午前中授業がなくても、礼拝からちゃんと来る学生もおりました。木曜日は音楽礼拝、土曜日は学生礼拝、そして他の日は学長、牧師、先生たちの奨励、など一応決まっています、わたしは音楽礼拝、学生礼拝にオルガンの奏楽をするようになりました。

さきほどもふれましたが、この栄光館のオルガンは、デントン先生の同志社における働きにたいして、彼女の希望によりアメリカの〈太平洋婦人伝道会〉から贈られた宝物であったのですが、戦時中のメンテ不可能——オルガンを維持する技術者がいない——時代を経た戦後、せっかくの楽器はたいへん悪い状態になっていました。布巻き電線をネズミにかじられたため、ショートや断線によりモーターが突然止まってしまうなどの事故や故障が起こりはじめていました。でも、日本にまだ3台しかないといわれた楽器のひとつとして、戦時中も礼拝が中止される最後の数ヶ月をのぞいて、毎日の礼拝時に演奏されていました。戦後は外国からのオルガニストもたびたび演奏してくださいました。1980年、現在のカサヴァン・オルガンが設置されるまで、本当によく活躍してくれました。ただ、オルガンという楽器は、つくられた国の民族性や言語と非常に関係があり、ドイツのものはドイツ語的な発音、音色を持ち、フランスの会社で作られたものはまた異なる特徴をもつのです。また、規模や時代によってもいろいろな様式があります。だから、栄光館のオルガンしか知らなかったわたしは、その後の海外での勉強ではたいへん苦労しました。でも現在、同志社にはドイツ、フランス、カナダ製のオルガンがあり、とてもめぐまれています。デントン先生のオルガンも、ちゃんと手入れができる人があり、そして充分な費用をかければもう一度かつての響を取り戻してくれるかもしれません。

大学宣伝旅行について

とにかく同志社女子大学は、まったく新しい学校制度の下に出発したので、夏休み、秋休みには、学長はじめ音楽の先生たちが、地方の校友会、同窓会の支部の協力を得て宣伝旅行をおこないました。わたしは、学生なのに何回かこれに参加しました。そして、地方の高等学校でヒバード学長——先生は日本生まれで、実は日本語はペラペラの方だったのです——が、スピーチの冒頭の部分のほんの一行あまりを英語で話される、その通訳をする、というお芝居をしたのです。これはリベラル・アーツ方式の勉強をすると音楽の学生でもこのように英語ができるようになる、ということを見せるためだったのです。気恥ずかしいような照れくさいようなことでしたが、わたしは大学1年生の時から学校のために働いたのです。もちろんピアノの演奏もしました。このような場合、地方の校友同窓のかたがたは本当によく協力してくださいました。宿の手配、講演や演奏の会場となる高等学校との交渉など、今もそうですが地方の校友同窓のかたがたの母校愛には感謝の心で一杯です。

今とちがって、汽車は鈍行が多く、あちこちの駅に停まりました。四国に行った時、川之江（香川県）の駅で、ヒバード先生と息抜きにプラットホームに降りていたら、突然汽車が動きだし、大慌てしたこともありました。車掌さんがよく見ていなかったのですね。なんか外人と日本人とがあんなところにいるけど、って慌てて停めてくださって、無事に乗ることができました。石炭を焚いて走る汽車には冷房などなく、夏は窓をあけていますから、いつもススで真っ黒になって旅行したものです。

課外活動（クラブ活動）のこと

同志社には昔から課外活動が盛んにありました。

女子大学ができたとき—わたしが1年生の時—には、課外授業の時間があり、それが必修でした。ヒバード先生と一緒に陶芸の河合寛次郎氏の仕事場にいったり、草月流のお花の展示会にいったり、当時神学部の助手だった竹中正夫²⁶⁾先生に指人形の作りかたを習ったりしたこともありました。その後これは必修ではなくなりました。

それはともかく、同志社には戦前から多くの課外活動のクラブがあり、音楽関係では合唱やオーケストラも盛んで、わたしはお手伝いとしてあちこちに顔を出していました。たとえば、同志社大学の学生オーケストラとは、はやくか

ら仲良くしていて、協奏曲のソリストをつとめ、演奏旅行にもよく行ったものです。

ただわたしの場合は、クラブ先生から教会での奏楽活動を優先させるように言われていたのと、オルガンとピアノを両立させることに専念していましたので、わたし自身のクラブ活動にまでは手が出ませんでした。

体育系のクラブもいろいろあったようで、私の同期生で、硬式テニスをやっていた友人は、いまでも現役の後輩との交わりをもち、ときには試合などもしているようです。彼女によれば、今純正館のあるところは当時運動場で、第2代学長の片桐先生が、アンツーカーのコートを1面どなたかからの寄附金でつくってくださったとのことでした。

初期の頃は、クラブ活動や学生会活動は、女子大学の学生と女専の学生とが一緒にやっていました。わたしはあんまり熱心でなかったのか、記憶にないのですが、運動会などもやっていたようです。

課外活動ではありませんが、現在では大層有名になったシェイクスピア劇も、女専英文科の最後の卒業生の人たちによって送別会での席上演されたのがはじまりでした。

卒業式のこと

同志社では卒業式は、かつては中学から大学まで、全同志社の諸学校合同でおこなわれていました。わたしが高等女学校を卒業した年（1948年3月）の卒業式が、最後の合同卒業式でした。父母のかたがたがこられても栄光館に全員が入れた²⁷⁾ということは、いかに少人数だったかの証拠です。

さて、女子大学の第1回の卒業式は、1953年3月18日におこなわれました。アメリカ式に栄光館の壇上で、1人ずつ学長から卒業証書をいただくのです。けれども、お辞儀して受け取って、握手して、というこのかたちは、時間がかかりすぎるといふことで、次の年から総代制になりました。音楽専攻の学生がまだまだ少ないので、送別の歌を歌うときには、わたしたちも場所を移動して、現役の学生たちと一緒に歌いました。自分で自分を送別するという、へんな具合でした。ただ、第1回卒業生といふことで、卒業式前に先生がた全員で送別会をしていただいたのは、本当に恐縮なことでした。もちろん学生側も謝恩会をしました。京都駅前にあったステーション・ホテルで、だったと思います。音楽専攻の卒業生はたった2人なので、わたしともう1人は適当に抜け出して、

栄光館でピアノを弾いているところの写真を撮って家に帰りました。もう学生の身分でなくなるのだ、と思ったとたん、なにか気が抜けてしまったようだったことをおぼえています。現在の卒業式の華やかだ雰囲気はわたしたちには全然ありませんでした。

今の同志社女子大学は、60年前とは想像もつかないような変化をとげています。学ぶための環境、建物、図書、生活のための手当て、またさらに最近は、いろいろな大学、企業との提携による研究やいろいろな講演会など、この上なく行き届いていますから、やる気さえあればなんでもできる状況です。しかし、同志社女子大学でなくてはならないものを見失ってほしくはありません。それはキリスト教精神と国際主義、そして60年前、学校名につけられたリベラル・アーツの精神です。これらはいつの時代にも同志社女子大学のもっとも基本的なものです。

旧制の女専でも、一般教養のレベルは高かったし、英語のレベルは、本当にしっかりしたものでした。だからこそ新制の女子大学は、問題も多かったのですが、その後は順調に発展してこられたのだと思います。

創設時の同志社女子大学—DWCLAの理想は、じつにすばらしかったのですが、まだまだ戦後で、時代が悪すぎました。それに、新しい学校制度に転換していくための準備も不十分、先生がたもどうしてよいのかよくわかっておられなかったのです。わたしたち学生も振り回されておりまして。でも、わたしたちは、ひたすら母校の発展、充実を願い、よく勉強したと自負しています。

第1期生が卒業し、新制度がひとまわりして、大学はやっとすこしずつ落ち着いていったと思います。わたしはその後、アメリカ、ドイツで学び、今日に至るまで1人の卒業生として、また教師として、後輩たちとともに同志社女子大学のなかで過ごしてきました。もう60年も過ぎたと思うと、まったく夢のような感じがします。今後も世界にたったひとつの同志社女子大学として成長を続けていかれることを祈る次第です。

ご静聴ありがとうございました。

(2008年12月12日)

この講演は、同志社女子大学史料室第14回企画展示「DWCLAの誕生—今に受けつがれるリベラル・アーツの精神」にともない、2008年12月12日（金）午後5時30分から、本学今出川キャンパス・ジェームス館207教室（J207）において、公開講演会として行われた。

注

- 1) **GHQ** 連合国最高司令官総司令部。対日占領政策を遂行するために設置された。最高司令官はマッカーサー（Douglas MacArthur, 1880-1964）元帥。
- 2) **女子部** 同志社では大学・中学等の「男子部」に対して女学校・女子専門学校・幼稚園を「女子部」と総称していた。
- 3) **湯浅八郎** ユアサ・ハチロウ（1890-1981）同志社第10代（1935-37）、第12代（1947-50）総長。のちに国際基督教大学の初代総長（1950-60）。
- 4) **片桐哲** カタギリ・テツ（1888-1982）同志社女子専門学校校長（1933-49）、同志社女子大学第2代学長（1950-53）。1913年、同志社大学神学部を卒業（第1期生）。学生時代、同志社グリークラブを創設した。専門はヘブライ文学。
- 5) **ヒバード** Esther Lowell Hibbard（1903-1999）宣教師の両親のもとに日本で生まれる。マウント・ホリヨーク大学卒業後、1929年、宣教師としてアメリカン・ボードから同志社女学校に派遣される。大戦中一時帰国したが、1946年、同志社からの要請により再来日して同志社女子大学の開設にかかわり、初代学長（1949-1950）となる。1968年同志社女子大学を停年退職、東北学院大学英文学科教授に就任。1973年、同大学を退職して帰米した。
- 6) **クラブ** Frances Benton Clapp（1887-1977）1918年、アメリカン・ボードの音楽専門の宣教師として同志社女学校に赴任。大戦中一時帰国したが、1946年、再来日して同志社女子大学音楽学科教授として1957年定年退職まで在任、その後帰米した。
- 7) **中瀬古和** ナカセコ・カズ（1908-1973）同志社女子専門学校講師を経て同志社女子大学音楽学科教授。作曲家。同志社女学校普通学部を卒業後渡米してワシントン大学、イーストマン音楽学校大学院でまなび、ベルリン国立高等音楽院でヒンデミットに師事、作曲を学んだ。
- 8) **デントン** Mary Florence Denton（1857-1947）同志社で働く志望を持って1888年 来日、その後1896-1901の期間を除き同志社女学校で英文学、家政学、英会話を教えた。1909年以來キャンパス内のデントン・ハウスに居住して内外の著名人と交流し、同志社への寄附をよびかけた。この寄附金によって女子部の多くの教室がたてられ、設備が充実されたところから「同志社女子部の母」と呼ばれた。日米開戦に先立って在日米国人に国外退去勧告や命令が出されたが、老齡、病身のため特に命令が取消され大戦中もデントン・ハウス（現在の新心館東半部にあった）に居住した。
- 9) **太平洋婦人伝道会** The Women's Board of Missions for the Pacific。アメリカン・ボード（American Board of Commissioners for Foreign Missions）の

婦人部。

- 10) **太平洋戦争** 第2次世界大戦のアジア・太平洋での戦争を指していう。1941年12月8日開戦。当時の日本側からは大東亜戦争といった。開戦に先立ち、4月には在留米国人の帰国が勧告され、同志社に来ていた宣教師たちもデントン（注8参照）以外全員が帰国した。
- 11) **ゾウグ** Elmer Harry Zaugg (1881-1971) 神学博士（シカゴ大学）。米国オハイオ州ハイデルバーグ神学校を卒業後、米国ドイツ・リフォームド教会の宣教師として、東北学院に就任（1906）。神学、音楽を教えた。東北学院校歌を作曲。1941年12月、日米開戦により退職して帰米。
- 12) **わたしの母** 鴛淵百合子（オシブチ・ユリコ、1903-1983）旧姓内藤、同志社女学校、女子専門学校を卒業後、女学校、女専の教員として音楽を教えた。
- 13) **礼拝も禁止され** 同志社女学校は、礼拝とキリスト教教育を守るためそれまで「各種学校令」によって「同志社高等女学部」と称して来たが、1945年4月、文部省国民教育局の指導により、あらためて「中等学校令」による、「同志社高等女学校」となり、正課として宗教教育をすることができなくなり、礼拝も始業前に幼稚園の園舎で行うことになった。
- 14) **音楽学科ではわずかに2人** 『同窓会名簿』には1952年度の卒業生として鴛淵紹子を含む5名が記載されているが、1953年3月の「卒業式」に出席したのは、…わずかに2名で、残りの3名はこの時点ではいわゆる「卒業延期」だった。
- 15) **木原均** キハラ・ヒトシ (1893-1986) 京都大学教授、植物遺伝学者。のち木原生物研究所を設立。コムギの起原を遺伝子レベルでつきとめた。
- 16) **園頼三** ソノ・ライゾウ (1891-1973) 同志社大学教授。美学。
- 17) **宮本正清** ミヤマト・マサキヨ (1898-1982) 立命館大学教授、のち京都精華短大学長。フランス文学者、ロマン・ロラン研究家。『ロマン・ロラン全集』を翻訳。
- 18) **竹中勝男** タケナカ・カツオ (1898-1959) 同志社大学教授。社会福祉理論および歴史研究者。1953年参議院議員に当選（社会党）。
- 19) **金子光介** カネコ・コウスケ 経歴等は講演中に紹介されている以外不明。専門は西洋近代文明史。著書に『最近獨逸の發展』（アカギ叢書第108編 赤城正蔵 1914）、『西洋文化史要』（三和書房 1952）、『近代西洋文化史概観』（世界思想社 1954）など。
- 20) **加藤順三** カトウ・ジュンゾウ (1885-1961) 女子大学教授。国文学、作文を担当。歌人。歌誌『帚木』主宰。
- 21) **田畑忍** タバタ・シノブ (1902-1994) 同志社大学教授。学長。法学者。のち「憲法研究所」を主宰、機関誌『永世中立』を発行。
- 22) **久次米哲子** クジメ・テツコ (1904-1988) 同志社女子大学教授。栄養学、栄養化学。
- 23) **大西マサエ** オオニシ・マサエ (1900-1997) 同志社女子大学教授。家政学概論、被服学。

- 24) **別所秀子** ベッシヨ・ヒデコ (1903-1994) 同志社女子大学教授。家政学部長。栄養学、調理学。
- 25) **大沢寮** 大沢善助 オオサワ・ゼンスケ (1854-1934) 京都の実業家。1877年新島襄から受洗、以来同志社の有力な後援者の一人) 氏の寄附により、1925年、キャンパスの東端 (アバマキの大木の南側) に建てられ、1969年夏撤去された。
- 26) **竹中正夫** タケナカ・マサオ (1925-2006) 同志社大学教授。神学者。キリスト教倫理学、宗教社会学。
- 27) **栄光館に全員がはいれた** 建築当初の栄光館の座席数は「1976席、補助席を使用すれば優に2000人以上を収容することができ」た (『同窓会・校友会期報』第56号 (栄光館落成記念号/1932・3))。

講師略歴

鴛淵紹子（オシプチ ツギコ）

京都市生まれ。同志社女子大学学芸学部音楽学科（ピアノ専攻）卒業。アメリカ・イーストマン音楽大学大学院修了（オルガン専攻）。ドイツではプレーメン音楽大学にて H. ハイנטツェ教授に師事した。

同志社女子大学教授として後進を指導する傍ら、1978～1980年には京都にて12回のオルガン演奏会『バッハチクルス』を開催して J. S. バッハの全オルガン曲を演奏。1995年11月京都コンサートホールのオープニングシリーズとしてオルガンリサイタルを開催するなど、演奏活動にも取り組む。

現在同志社女子大学名誉教授、日本オルガニスト協会会員、日本音楽学会会員、京都市音楽芸術文化振興財団評議員、京都コンサートホール企画運営委員。

1984年度藤堂音楽賞、1995年度京都あけぼの賞、2005年度京都市芸術功労賞等の各賞を受賞。

第 I 期生の見た DWCLA

(同志社女子大学史料室講演会記録 1)

講師：鴛 淵 紹 子

編集：同志社女子大学史料室

発行日：2010年3月1日

発行：同志社女子大学

〒602-0893 京都市上京区寺町通今出川西

TEL 075-251-4200

FAX 075-251-4201

e-mail : shiryo-i@dwc.doshisha.ac.jp

印刷：(有)木村桂文社

